

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730395
 研究課題名 (和文) 親密な他者に対する自己高揚的自己呈示が自尊心及び精神的健康に及ぼす影響
 研究課題名 (英文) The effect of the self-enhancing presentations toward their close friends on their self-esteem and mental health
 研究代表者
 谷口 淳一 (TANIGUCHI JUNICHI)
 大阪国際大学・人間科学部・講師
 研究者番号：60388650

研究成果の概要：本研究では、友人など親密な他者に対して自分自身のポジティブな側面を示すことが自尊心や精神的健康の高揚、維持に寄与するプロセスを検討することを目的とした。大学新入生の友人ペアを対象にして、4か月にわたって4回の縦断調査を行った結果、自らの親しみやすさの側面を他者に示すことで、実際に他者からそのような評価を得ることができ、互いの関係満足感を高めることが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	240,000	1,040,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：自己呈示、自尊心、親密な関係、精神的健康、縦断調査

1. 研究開始当初の背景

青年期において精神的健康や自尊心を高く維持することは重要な課題であり、これまで多くの研究がこの課題に取り組んできた。本研究では、親密な他者に対して自己呈示を行うことが自尊心や精神的健康の高揚、維持に寄与するプロセスを検討した。また、その前提条件として、親密な関係においては自己高揚動機および自己確証動機をともに満たすことができることを検証した。

高自己評価者と低自己評価者の自己呈示傾向の相違についてはいくつかの見解があ

る。Baumeister, Tice, Hutton (1989) によれば、高自己評価者は自己高揚的自己呈示を行い、低自己評価者は自己防衛的自己呈示を行うということである。また、久保 (1998) では、高自己評価者は自らの望ましくない部分よりも望ましい部分を積極的に呈示するのに対し、低自己評価者ではそのような傾向は見られないという結果が得られている。これらの結果は低自己評価者が自己高揚的呈示を行いにくいという傾向を示している。

低自己評価者が自己高揚的自己呈示を行いにくい理由としてはいくつか考えられる

が、その1つとして、低自己評価者が自己高揚的自己呈示を行うことは自己高揚動機の充足につながるが、自己確証動機を満たすことができないことが挙げられる。低自己評価者にとって自己高揚的自己呈示で呈示されている自己は、自己認知を大きく逸脱したものであり、正確なものであるとは思えない。そのため、仮に他者から求めていた自己高揚的なフィードバックを得ることができたとしてもそれを正確な評価であると受け止められないために、自尊心や精神的健康の高揚につながらない。すなわち、他者に対して自己呈示を行い、それについてフィードバックを受け取るというプロセスの中で自尊心や精神的健康を高揚・維持するためには、自己高揚的な呈示を行い自己高揚的なフィードバックを受け取るだけでなく、そのフィードバックを正確であると認知することが必要である。

Swann, Bosson, & Pelham (2002)の提唱する戦略的自己確証 (Strategic self-verification) モデルは、このような自己確証動機と自己高揚動機の両立が親密な関係においては可能であることを示している。戦略的自己確証モデルでは、親密な他者からはポジティブな評価を受けるに値すると考え、親密な他者から自己認知よりもポジティブな評価を受けていてもそれを正確な評価であると認識しているとしている。また、Swann et al. (2002)では、恋人から好ましい評価を望むことと実際に恋人から好ましい評価を得ることを、恋人に対して好ましい自己呈示を行うことが媒介していることを示している。

すなわち、親密な他者に対して積極的な自己呈示を行うことで、自らの求める理想的な評価を得ていると認識することができると考えられる。そして、理想的な評価を恋人から得ていると思えることは自尊心の高揚・維持にもつながり、また精神的健康も高めると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、親密な他者に対して自己高揚的自己呈示を行うことが自尊心や精神的健康の高揚、維持に寄与するプロセスを検討することを目的とした。

(1) 青年期において友人関係を維持することは重要である。また、良好な友人関係を維持するためには、友人から好ましい評価を得ていると認知することができると、そして実際に友人から好ましい評価を得ていることが必要であると考えられる。研究1では、友人に対して自己高揚的な自己呈示を行うことが友人からの評価に影響を与えるかについて検討する。

友人に対してどのような自己呈示を行う

かに関しては、谷口 (2006) や谷口ら (2005) が大学新生を対象とした縦断的研究を行い、検討している。谷口 (2006) では、大学新生が大学入学前の友人に対しても、また大学入学後の友人に対しても、自己評価よりもポジティブな自己を呈示しようとする自己高揚的自己呈示を行っていることが示された。本研究では、まず、友人に対して自己高揚的自己呈示を行っていることを確認する。また、友人関係の維持のためには友人から高い評価を得ることが必要であると考えられるため、もともとの自己評価が低い低自尊心の方が高自尊心者よりも自己高揚的な自己呈示を行う傾向が強いとの予測について検討する。

親密な関係にある他者からの評価について、谷口・大坊 (2004) は恋人関係を対象にして検討しており、恋人からは自己評価よりも高い自己高揚的な評価を得ていると推測していることを示している。研究1では、友人からどのような評価を得ているかの推測である反映的自己評価 (長谷川・浦, 1999) が自己高揚的であるかだけでなく、実際に友人からは自己高揚的な評価を得ているのかについてもペア調査を行うことで検討する。すでに形成されている友人関係では、自己高揚的な評価を得ていると予測できる。また、そのような傾向は、親密である関係において顕著であるという予測についても検討する。以上の検討を行った上で、研究1では、自己呈示が友人からの評価に及ぼす影響について検討する。谷口 (2005) では、自己呈示行動として化粧行動を取り上げ、親密な異性関係において、自己評価→自己呈示動機→反映的自己評価という影響過程がみられることを示している。また、谷口 (2006) では、大学新生を対象とした縦断的調査において、友人に対して自己高揚的自己呈示を行っていることが、その後の反映的自己評価を高めることを示している。研究1では、友人関係において自己高揚的な自己呈示を行うことが反映的自己評価に与える影響に加え、実際の友人からの評価に自己呈示がどのような影響を与えるかについても検討を行う。具体的には、自己評価→友人に求める評価→自己呈示→友人からの評価→反映的自己評価、という仮説モデルについて検討する。また、自己呈示が友人からの評価に与える影響過程は関係の親密さの高低によって異なることが予測されるため、関係の親密さの高低別に検討を行う。親密さが高い関係では、積極的に自己呈示を行わなくても友人から十分に高い評価を得ているため、親密さが低い関係に比べて、自己呈示は友人からの評価に影響を与えないと予測できる。

(2) 研究2では、同性の友人に対して自己呈示を行うことが、友人との関係の形成、及び

自尊心の高揚に寄与するプロセスを検討する。

友人関係の形成・維持のためには、友人から好ましい評価を得ていると認知すること（反映的自己評価が高い）、そして実際に友人から好ましい評価を得ていることが必要であると考えられる。また、ソシオメーター理論（Leary & Downs, 1995）が自尊心を社会的絆が確保されているかどうかの指標であると定義していることに従えば、自尊心の高揚・維持にも、友人からの評価、及び反映的自己評価が高いことが寄与すると予測できる。

以上より研究2では、友人関係のペア・時系列データを収集し、自己呈示がその後の関係満足感（友人関係の形成の指標）及び自尊心に与える影響、そしてその影響を反映的自己評価、及び友人からの評価が媒介するかを検討する。なお、友人関係の形成・維持のためには、自らが親しみやすく好意的な人物であると思われること、自尊心の高揚・維持には、能力ある人物であると思われることがそれぞれ必要であると考えられるため、関係満足感に対しては親しみやすさの自己呈示が与える影響、自尊心に対しては有能さの自己呈示が与える影響を検討する。

3. 研究の方法

まず研究1では、実際に親密な関係においては自己高揚動機および自己確証動機をともに満たすことができていることを確認し、親密な他者から自己高揚的な評価を望むことと実際に親密な他者から好ましい評価を得ることの間を、親密な他者に対して自己高揚的自己呈示を行うことが媒介するという仮説の検証を行うために、質問紙調査を行った。質問紙調査では、被調査者に友人とペアになるよう求め、ペア同士を互いの回答がわからない距離に移動させ、個別に質問紙への回答を求めた。質問紙の内容は、①自己認知、②ペアになった友人に対してどの程度好ましい自己呈示を行っているのか、③ペアになった友人から実際にどのような評価を得ていると推測できるか、④ペアになった友人からの評価はどの程度正確であると思えるか、⑤ペアになった友人に対する評価、⑥関係の親密さ、⑦自尊心、⑧孤独感、である。自己呈示を測定する尺度としては、谷口・大坊（2006）の自己呈示尺度の中から「有能さ」と「個人的親しみやすさ」の2因子に含まれる項目を使用した。

研究2では、大学新生を対象にして縦断的ペア調査を行い、1、友人に対して自己高揚的自己呈示を行うことで、その後実際に友人から好ましい評価を得ることができるのか、2、親密になるにつれて友人に対して実際に自己高揚的な評価を行うようになる

のか、3、そのような自己高揚的な評価は自己高揚的自己呈示によって媒介されるのかについて検討した。調査は、大学新生を対象に、4月～7月にかけて4回（1月間隔）、行った。調査は、研究代表者が担当する心理学関連の講義中に行い、被調査者に友人とペアになるよう求め、ペア同士を互いの回答がわからない距離に移動させ、個別に質問紙への回答を求めた。質問紙の内容は、1、自己認知、2、ペアになった友人に対してどの程度好ましい自己呈示を行っているのか、3、ペアになった友人から実際にどのような評価を得ていると推測できるか、4、ペアになった友人からの評価はどの程度正確であると思えるか、5、ペアになった友人に対する評価、6、関係満足度、7、関係の親密さ、8、自尊心、9、精神的健康、であった。

4. 研究成果

研究の結果、以下のことが明らかとなった。(1) 友人関係で自己高揚的自己呈示を行うという傾向は低自尊心者で顕著に見られた。友人関係を維持するためには相手からある程度ポジティブな評価を得る必要があると考えられる。自己評価の低い低自尊心者は、そのような評価を得るために自己高揚的自己呈示を行うのではないかと考えられる。また、友人からは高い評価を得ていると推測しているだけでなく、実際に自己高揚的な評価を得ていた。さらに、低自尊心者ほど、自己高揚的な評価を得る傾向は顕著であり、親しい関係であるほど、友人から高い評価を得ていた。この結果は、低自尊心者にとって親密な友人関係は、ポジティブなフィードバックを与えてくれる重要な関係であることが示唆している。(2) 友人に“親しみやすい”という自己呈示を行うことで、実際に友人から“親しみやすい”という評価を得ることができ、そのような評価を得ることで関係満足感が高くなっていた（Figure 1 参照）。(3) 友人から“親しみやすい”という評価を得ることができれば、その後、友人の関係満足度も高くなっており、“親しみやすい”という自己呈示は、友人から高い評価を得ることで、自己呈示を行った本人と友人の両方の関係満足感を高めており、自己呈示が関係の安定に繋がっていることが示された（Figure 1 参照）。(4) 友人に“能力がある”という自己呈示を行っても、友人からの評価を高めることはできず、能力に関して友人から実際に高い評価を得ていても、自尊心が高くなるわけではなかった（Figure 2 参照）。(5) 自己呈示⇒反映的自己評価⇒自尊心、という影響過程がみられ、有能さの自己呈示が自尊心を高めるという関連は、他者を介さな

い影響過程であることが示された (Figure 2 参照)。

(3) 連携研究者 ()

研究者番号 :

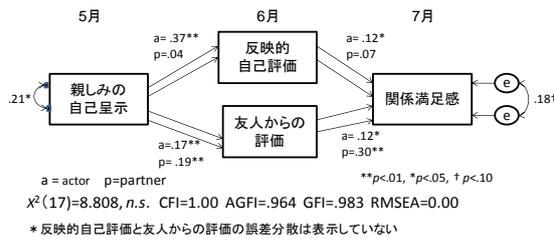


Figure 1 親しみの自己呈示から友人からの評価、反映的 自己評価を媒介した関係満足感への影響

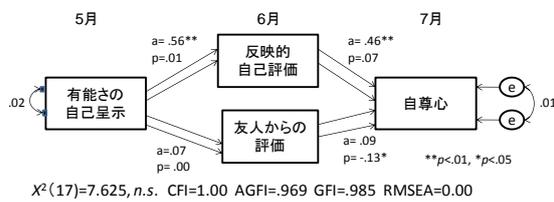


Figure 2 有能さの自己呈示から友人からの評価、反映的 自己評価を媒介した自尊心への影響

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 谷口淳一、清水裕士、ペア・縦断データを用いた友人関係の形成に関する研究 (1)～自己呈示が友人からの評価及び関係満足感に及ぼす影響～、日本社会心理学会第 49 回大会、2008 年 11 月 3 日、鹿児島大学
- ② 谷口淳一、自己呈示が友人からの評価に及ぼす影響、日本社会心理学会 48 回大会、2007 年 9 月 23 日、早稲田大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 淳一 (TANIGUCHI JUNICHI)
大阪国際大学・人間科学部・講師
研究者番号 : 60388650

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :